

熊本地震DMAT派遣報告

救命救急センター 副医長

坂東 敬介

今回発生した平成 28 年熊本地震に関して、北海道DMATにも 4 月 16 日派遣要請がかかり、市立札幌病院DMATとして初めての出勤となりました。メンバーは、自分のほかに看護師 源本尚美、野原正美、業務調整員 大下直宏、中村真由美の計 5 名で出勤しました。道内からは札幌医大をはじめとし計 7 チームでの派遣となりました。出発前には、関院長より激励のお言葉をいただき、メンバー全員しっかり任務を果たそうと決意を新たに出発しました。いつ起こるかわからない災害に備えて定期的に訓練を行っていましたが、初めての出勤であり緊張しながらの移動となりました。

1 日目は千歳空港から自衛隊機で夜 22 時過ぎに熊本空港に到着し、活動拠点である熊本県菊池市にある川口病院へ移動し翌日からの指示をあおぎ、その日は公民館で休むことになりました。2 日目は早朝から移動し大津町役場に派遣となりました。役場の庁舎も倒壊のおそれがあるとのこと隣接する建物で情報を収集しました。町内では公設および私設をあわせおよそ 70 数か所の避難所があり、避難人数および医療ニーズの把握につとめることから始まりました。初めての土地であり役場の保健師さんに同行していただき、手分けをして各避難所をまわりました。幸い、重症な方はいませんでしたが、点滴を行ったり環境面の調整などできる範囲でお手伝いをさせていただきました。後日ニュースになっていましたが、余震が非常に多く、建物内では安心して過ごせないとのこと避難所のそばの車両内ですごされている方も多かったのが印象に残りました。3 日目は平日ということもあり、医療機関も開きはじめていたため、他地域へ移動し前日と同様に活動しました。そうして3日間の活動を終えて、帰路につきました。帰りは福岡まで移動して空路帰札となりました。余震が続く中での活動となりましたが、メンバー全員無事活動を終えることができました。

今回の活動を通して感じたことですが、DMATのイメージといえば、がれきの中の医療を思い浮かべる方もいると思いますが、それ以外にも被災した病院の支援や多数傷病者が発生した際の広域搬送、そして避難所での医療ニーズの把握などといった任務があり、今回はこちらがメインとなりました。急性期が過ぎても被災地では通常の生活にもどるまで期間を要するため、最初に状況を把握して次の支援活動へつなげることはとても重要なことでもあります。目に見える疾病に対処することはもちろんですが、何より大切なのは被災された方々のお話をよく伺い、共感することだと思いました。これは震災時に限ったことではなく、普段の診療にも通じることだと痛感しました。短時間ではありましたが、お話をさせていただくなかで、「わざわざ北海道からきてくれてありがとう」といったお言葉もいただき、こちらが勇気づけられる場面もありました。

最後になりますが、今回の派遣にあたり院長はじめ各診療科の先生方、看護部、薬剤部、検査部、事務の方々と、病院全体のご理解ご協力をいただき出勤させていただくことができました。本当にありがとうございます。今回の経験をいかして、今後もいつおきるかわからない災害に対して備えていきたいと思っています。



DMAT チームのメンバー